

第IV部門

修学院離宮上御茶屋の敷地選定についての景観的考察

京都大学工学部 学生員 ○北野 琢人
 京都大学大学院工学研究科 正会員 川崎 雅史

京都大学大学院工学研究科 正会員 出村 嘉史
 京都大学大学院工学研究科 正会員 樋口 忠彦

1. 研究の背景と目的

日本庭園には優れた水辺空間を有するものが数多く存在している。その中でも日本を代表する庭園である修学院離宮の上御茶屋は、周囲の環境と一体となっている¹。修学院離宮の作庭者である後水尾上皇は、15年間山荘を営む場所を探してまわり現在の修学院離宮の場所を選び、池を造成したといわれている。このようにして、場所の特性を読み解き、周囲の環境と調和する努力がされたのである。

この場所を読み解く思考プロセスについては上御茶屋の持つ諸条件を整理して、更に広い離宮造営候補領域の中で、離宮設計を試みることによって迫ることが出来る。本研究は、修学院離宮上御茶屋の立地及び造成について、地形情報を基にCADによる設計シミュレーションを行い、土木技術と文化的造形が調和した歴史文化遺産を生み出した後水尾上皇の設計思想を明らかにすることを目的とする。

使用した地形データは、修学院離宮造営の地形については森蘊の「修学院離宮造営に利用された建物と地形について」で示された上御茶屋付近地形推定復原図を基に、修学院地域については大正14年製版の1:3000地図を使用した。上記の地図に記載されていない東山一帯の山岳部は10m間隔の等高線データを使用した（国土地理院発行「数値地図25000」平成11年）

2. 池造成候補ゾーンの選定

上皇は離宮を造る場所を最終的に現在の修学院離宮の地に決定したが、そのなかで現在の離宮の場所がただちに選択されるわけではない。そこで離宮造成の対象地を修学院地域とする。

場所の選定にあたり決定的な条件は、池を造成する際に水を溜めるために必要と考えられる社会的理由によって離宮の造営が不可能な除外すべき条件と、地形的条件が考えられる。

社会的除外条件としては①過去に洪水被害にあった地域と②すでに土地利用されていた地域が挙げられる。

次に、地形的条件としては、池の造成方法には周囲に土を盛り、その内側へ水を引いてくる「ため池」を作る方法と、谷筋の川を堰き止めて「ダム」を作る方法の二つがある。対象地の地形は国土地理院発行「土地条件図 京都」を見ると、大きく急斜面・扇状地・浅い谷に分けられる。ここで上に上げた二つの池の造成方法は池の片側を地形に、片側を堤防によって水を受け、ためるため、扇状地の斜面における尾根筋は造成不可能と考えられる。また、急斜面地において堤防は高さが必要になるため大規模な池は造成不可能と考えられる。尾根筋でない扇状地の斜面（以下斜面と呼ぶ）でため池を作る方法、谷についてはダムを作る方法で各ゾーンにおいて池を設計する。

その条件に当てはまる造成可能な範囲を6つの池造成候補ゾーンに大別した。（図1）

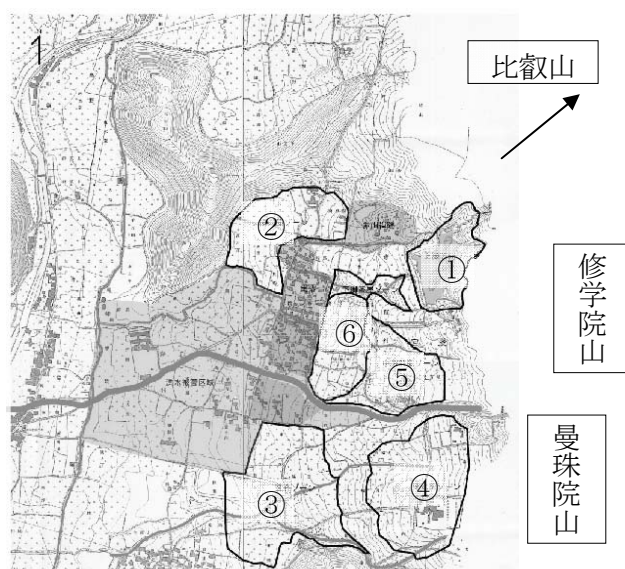


図1 離宮造成候補領域と候補ゾーン

3. 景観評価方法

前章において、設計された池について前章に挙げた造成可能で秀麗な各庭園池において、地形データに基づくCGによる透視図を作成し、地形条件など

に由来して成立する基本的景観像を評価する。

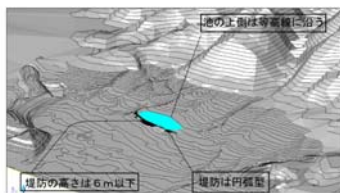


図2 斜面での池設計例

3.1 視点場の選定

選ばれた池について、池の周りを一周した際に見えるものを評価する視点場として外周を八等分し各点から1m離れた点を選定する。次に現在の隣雲亭のように池を俯瞰できる建築からの見え方を評価する視点場として、池周辺において標高差約10m付近で建てるのが可能な場所が存在する場合はその点を選定する。また修学院離宮には中島には窮遂亭という建築があり、自然地形を生かして中島を造成できる場合には中島からの視点場をとることとする。他に、止止斎という建築が池の北側にあったが、これは外周からの視点場で補うこととする。

3.2 評価項目の整理

評価項目としては以下に示すように、①周囲の地形と池の距離、②周辺の山の距離・仰角・見え方、③シークエンスの変化、④洛中方向との池の水面を含む眺望の構成⑤池を俯瞰する視点場からの池の見え方が挙げられる。特に、②について作庭者の後水尾上皇は比叡山に対するこだわりがあり、比叡山の見え方については注目することとする。⑤の池の見え方について、樋口忠彦は『景観の構造』で「俯角10°近傍の視線が水面に届いている場合、港や湖が視点のあるhereの領域と視覚的に一体のものとして感覚される」と述べている。このことより、俯角10°の視線が池に

落ちているかを池の俯瞰の指標とする。また、池を俯瞰した際の背景に何が見えるかも把握する。

設計した各池において、これらの項目について評価を行う。

4. 分析結果

前章で設定した景観評価項目に加え、面積と自然地形を利用した中島の評価を各ゾーンで選ばれた秀麗な池について評価を行った結果を表1に示した。これより他の候補地と比較すると、上御茶屋は中島・シークエンスの多様性・洛中方向の俯瞰の構図・池の俯瞰が特徴であるといえる。

5. 結論

離宮造営候補領域においてCADによる設計シミュレーションを行うことによって、次のことが明らかになった。

(1) 池の面積を最重要とするなど、後水尾上皇が求める項目が違ったとしても、現在の修学院離宮よりも優れた庭園を造営した可能性は様々にあった。

(2) 後水尾上皇が現在の形に選ぶ最重要とした項目は、①自然地形を生かし造成される中島②地形と中島による優れたシークエンスの変化③洛中方向の水面の見えの構図④池を俯瞰した際の池の背景であったと結論付けられる。

参考文献

- ¹ ブルーノ・タウト、訳 篠田英雄、『日本美の再発見』、岩波書店、1939、p162

	面積	中島	山との距離	山の見え方 (黒：比叡山)	シークエンス	洛中方向	池の俯瞰	
							俯角10°に池があるか	背景
①上御茶屋	△ 12000 m ²	3	近接		非常に多様	池と空 がメインに見える	○	北山
②横山麓	◎ 26000 m ²	0	近接		単調	見えない	○	比叡山
③鷺森	△ 9000 m ²	1	一部で近接		非常に多様	池と平地と空 が見える	○	対象地内
④曼珠院・⑤中御茶屋	▲ 6000 m ²	0	近い		単調	池と空 がメインに見える	×	洛中
⑥下御茶屋	△ 12000 m ²	0	遠い		単調	池と平地と空 が見える	×	洛中